

北海道支部設立 50 周年を祝す

田 中 俊 逸



日本分析化学会北海道支部は昨年設立 50 周年を迎えた。1957 年 7 月 27 日に北大理学部で支部設立の発会式が行われ、合わせて研究発表会が行われている。それから 50 年目にあたる昨年、支部では 50 周年を記念する幾つかの記念事業を行った。それらは 50 周年記念誌の発行であり、長年支部活動を支えてくれた業界の方の表彰であり、記念祝賀会の開催である。記念祝賀会は去る 10 月 28 日、56 名の支部会員の参加のもと盛会に行われた。

北海道支部の会員数は約 250 名（本会会員の約 3%）であり、7 支部の中で最も会員数が少ない支部である。しかし、支部活動は極めて活発であり、夏と冬の研究発表会、氷雪、緑陰、公開の三つのセミナー、化学教育研究協議会、支部ニュースの発行等が年次行事として行われている。また、支部で編集された出版物は 6 冊に達しており、これらの本の中には数度の改訂を経て、40 年の長きにわたって発行し続けているものもある。

これらの支部活動を可能にしているものは何であろうか。支部活動の礎を築いてくれた先輩諸氏の「滅私奉公・粉骨砕身」（この言葉は北海道支部幹事に課せられたモットーとなっている）の働きによることはもちろん、本会本部、他支部、他学会北海道支部、業界の協力と支援なしにはできなかった。しかし、最も大きな理由は、北海道支部は全員野球をしていることによる。つまり北海道支部では会員の 4 人に 1 人は幹事であり、その任期は無いに等しい。この全員野球体制が支部活動を行う上で大きな効果を与えているように思われる。

昨年、北海道は一躍野球王国になった。夏には甲子園で苫小牧工業が準優勝し、秋には日本ハムファイターズが中日をも破って日本一に輝いた。冬の間雪に覆われ野球ができないのだから、^{ひところ}一頃前までは北海道は野球に適さないところとされ、本州のチームと対戦したときには負けてあたりまえと、選手・監督もそして応援する方も納得していた。しかし、その常識を覆すことが起こった。常識を覆すには常識破りの練習が必要だ。苫小牧工業では雪のあるグラウンドで内野守備の練習をすることで、多少のイレギュラーに対応できる守備力を身につけた。ハンディーをバネとすることで他にはない特徴を獲得したのだ。

中央と地方、本部と支部、それらの中には予算や仕事の配分など様々な問題が常に存在する。お互いにどのように折り合いをつけながら発展していくのか。地方がなんらかのハンディーを持つとすれば、それを解消する方向に進めなければならない。しかし、地方もまた、ハンディーが解消されなければ何もできないというのは何も解決しない。ハンディーをバネに、他にない新しいものを作り上げる必要がある。学問の世界では情報機器やシステムの発達等により、中央と地方の格差はどんどん狭まってきている。格差が完全になくなったとき、我々地方が何も持っていないのだったらと考えたら恐ろしい。そうならないように、常日頃の鍛錬が必要なのであろう。

〔Shunitz TANAKA, 北海道大学大学院地球環境科学研究院, 日本分析化学会北海道支部長〕